



「家族の資料に見る亡くなった人びと」コーナー

【関連エッセイ】

見えない経験—山岸とみこの小説「わたしの場合」に寄せて

山本唯人

東京大空襲・戦災資料センター主任研究員

同人誌『こみゆにてい』に参加する作家・山岸とみこさんから、新作「わたしの場合」の収録された同人誌作家の作品集『水脈』（尾高修也監修、ファーストワン）を送っていただきました。

『こみゆにてい』は、池袋コミュニティ・カレッジの講座「小説の作法」の受講者やそのOBOGが発行する小説の同人誌です。講師は、作家で元日本大学芸術学部教授の尾高修也さんが務めています。

山岸さんは、1944年、東京都生まれ。1981年、創刊以来の『こみゆにてい』のメンバーです。「わたしの場合」は、2017年11月発行の『こみゆにてい』第100号に、最初に発表されました（山岸 2018:164）。

「わたしの場合」は、1953年前後の高崎で、子どもだったころの「わたし」が、東京大空襲で母と兄姉3人を亡くし、もらわれてきた子どもであることを告げられるシーンからはじまります。父親は1944年2月に亡くなっていました。「わたし」は、心のうちに深い

傷を抱えながら、しばらく、東京大空襲のことから遠ざかっていましたが、60代になり、肺がんをわずらったことをきっかけに、母たちの死に様を突きとめようと決意します。

戸籍謄本から母たちの状況を知った「わたし」は、東京都が作成する『東京空襲犠牲者名簿』に母たちの名前を申請し、2017年3月10日、東京都慰霊堂で開催された慰霊法要と名簿登載式、および、東京都主催の記念行事に参加します。この間、「わたし」のなかに去来した心の声が、繊細に描写されていきます。

山岸さんとは、2月24日、戦災資料センターで開催中の特別展「名前と顔と足あと—3月10日・失われた人びと」のトークイベントで、再会しました。

貴重な機会と思い、わたしが主に担当した、「家族の資料に見る亡くなった人びと」コーナーの感想を聞いてみました。

「家族の資料に見る亡くなった人びと」コーナーは、『都内戦災殉難者霊名簿』に記載された死者の名前と顔写真を、遺族の承諾を得て、解説と共に1家族・1枚のパネルにまとめて展示するものです。今回は、3家族、11人のお名前を公開しています。

そのテーマの一つは、空襲までそこに生き、暮らしていた人びとの「存在の記憶」を、見るひとに、伝えることにあります。

〇〇という名前を持った「この人」が、確かに、そこに、いた、こと。

そして、その人が、空襲の炎にとりまかれ、3月10日という日付を持ったその日に、命を落としたと、実感を持って受け止めてもらうこと。

それが、ここでいう、「存在の記憶」を伝えるということです。

パネルに吹き付けられているのはインクとそれがかたどったカタチや記号にしかすぎません。そこには、戦災の遺物と同じような意味での「ホンモノ」の資料は何もありません。すべてが紙に印刷されたイメージです。

それでも、パネルの前に立ったとき、「こんなひとがいたんだな」「このひとが空襲で亡くなったんだな」と、何気ないたたずまいのなかに、感じとってもらえること。

その何気ない、しかし、確かなひとの存在感を、研究と見せ方の粋を凝らして表し、伝える—それが、このコーナーにかけた目標でした。

山岸さんの感想は、中身をつくることに夢中になっていた自分には、少し意外なものでした。

「この方たちには、どうしてこんなに写真が残ったのでしょうか。それを、ご本人たちに聞いてみたい」。

こうした疑問は、今回の小説を書いていく経験とつながっているかもしれません。

「わたしの場合」の主人公には、育ての父親が語った、「みんな、昭和20年3月10日の大空襲で死んだ」「今日の今日まで一切の連絡がない。みんな死んだと思うほかない」とい

う言葉と、仏壇から取り出して見せられた小さな位牌、そして、差出人が「井上美代」と書かれたハガキしかない。

そのハガキを見たとき、主人公の「わたし」は、「初めて、母親たちが空襲に遭い、本当に亡くなったと、徐々に思えてきた。どことなく不確かだけれど、でも事実なのだろうという感じだ。／ともかく大空襲は、わたしをひとりにした。それがわたしの中に残った。大きな事実だった。繰り返し、自分に言い続けた。大空襲はわたしをひとりにした。続けている内に、ひとりで生きていく覚悟が、できて行くように思えた」（山岸 2018:137）。

やがて、「わたし」は高校受験をせずに、家を出ると決意し、東京に出ます。

このプロセスのなかに、目に見える「ひと」のイメージは、何もありません。

「わたし」は、自分を生んだ母親、一緒に過ごしていたに違いない、兄姉たちの姿を目で見て、確認することができないのです。

すべてが、言葉を通して、「わたし」の心の奥深いところを揺さぶり、刻み込まれていきます。

今回のパネルでは、死者の顔写真が、大きく引き伸ばされ、強い存在感を放っています。こうした方法で、例えば、この小説の主人公のような経験を、うまく伝えることができるでしょうか。

そうした問かけが、山岸さんのひとことには、あるように思いました。

展示した11人の死者のうち、当時生後3か月だった1人を除いて、たまたま、全員の顔写真をそろえることができたことも、こうした印象につながっているかもしれません。

実際には、当時持っていた写真はすべて焼かれてしまい、家族の写真は何もない方も多かったです。そうだとすれば、まず写真をそろえて、そこに言葉を添えていくという発想では、本当に幅広い死者たちの存在を伝えることは難しいかもしれません。

写真がなければ、おのずと、パネルは文字だけになります。

文字だけのパネルを、今回のようにA1まで引き伸ばして見せるのは、冗長でふさわしくないかもしれません。

もう少し中ぐらいの大きさに、パネルの大きさをあえて縮めること。

そして、写真のあるパネル、写真のないパネル、名前だけ、逆に名前は分からないが、写真だけが残っている、究極的に言えば、「亡くなった」という情報だけがあって、名前も写真も分からない死者など、色々なパターンのパネルが、ふぞろいに壁にかかっていることが、多様な死者の存在を表す上で、だいじかもしれないと思いました。

もう一つ、山岸さんには、こうした体験を、あえて小説として書いた理由を、質問してみました。

空襲の記録には、体験者自身が書いた「体験記」が多くあります。あるいは、早乙女勝元さんの『東京大空襲—昭和20年3月10日の記録』（早乙女 1971）のように、作家があ

えてドキュメントとして書いた作品もあります。

空襲体験について、小説が書かれることは、量としては少なかったかもしれません。

山岸さんは、「体験をなるべく多くのひとに伝わるようなかたちで描きたかった」、また、「素の言葉では語りづらいこと、一般的に悪いイメージにとられかねないことが、小説だとかきやすいという面があるから」という趣旨のことを、答えてくれました。

前者は、文学作品も、ものごとを普遍化して伝えるひとつの方法であること、後者は、人間にとって、「真実」といえるような経験を伝える方法は多様であり、ときに複雑な回路を必要とすることを、教えてくれます。

小説のなかで、「わたし」は、自分を傷つけたり、不安な思いにさせた、育ての親たちや地域の人びとのふるまいを、「わたし」の思いの側から、率直に描いています。

もしこれが、当事者によって書かれた体験の「記録」だったら、あるいは、作家が取材して書いたドキュメンタリーだったら、これらの触れにくい事実が表に現れることはなかったかもしれません。

あえて、小説というフィクションのカタチをとることで、描ける「真実」がありうることを、山岸さんの答えは示していると思いました。

わたしたちが、実証的な方法だけが、「歴史」の資料館としてとるべき態度であると思いつくことで、伝え損ねている体験とは何かという問いを、山岸さんの作品は投げかけています。

「わたしの場合」は、東京都の記念式典に向かう送迎バスのなかで、たまたま隣にすわった「わたし」とある女性の会話のシーンで終わります。

その女性は、東京大空襲で妻を亡くし、いまだに、悪夢にうなされる父を持っています。その父が認知症になり、出かけられなくなったので、娘の彼女が3月10日の式典に来ました。その女性が、「わたし」に問いかけます。

「ひとつ、よろしいでしょうか。父が認知症になって、判らなくなって、母への苦しみから、解放されることがあるでしょうか。

その問いを向けられ、胸のうちを、様々な思いがかけめぐりますが、「わたし」は、「どうでしょうか」と、あいまいな言葉を返すことしかできません。

そして、「女性の父親の傷痕は、焼夷弾の恐ろしさと共に、これからも生き続けると思われた。／スルリと抜けた感触。離れたぬくもり。燃えながら走る背中—それらは、消えようがない、まさしく悪夢だ。／わたしの小さな悪夢もまた、生き続けるだろう」と、山岸さんがこの小説に込めた、本当のメッセージを残して、作品は終わります。

そこには、「曖昧な」言葉のやりとりしかありません。

それでも、そのメッセージは、「何となく通じたように思われた」という不思議な感覚を「わたし」に残します。

ふたりは笑顔で分かります（山岸 2018: 163-164）

今回、展示した顔写真の多くは、うっすらと笑みを浮かべています。

写真館で撮った、女学校の卒業記念写真。

家族で赤ん坊を抱っこしたお宮参りの写真。

堂々した壮年の男性が写った写真。

しかし、どの写真も、目を凝らしてみると、その表情のなかに、完全に意味づけることのできない、あいまいさが含まれていることに気がきます。さらに、レイアウトされた名前と顔写真のまわりには、たくさんの余白があって、パネルには表せないものの存在を示唆しています。

表現の多様性を認めること、そして、余白の存在に思いをはせることが、「存在の記憶」を伝える展示の前提であることを、山岸さんの小説とセンターで交わした短い会話が、教えてくれていると思いました。

山岸とみ子, 2018, 「わたしの場合」(三沢ほか, 2018:121-164) .

山岸とみ子, 2017, 「わたしの場合」『こみゆにてい』(100):18-35.

三沢充男・田原玲子・江平完司・山岸とみ子・根場至・春木静哉・水澤世都子, 尾高修也監修, 2018, 『同人誌作家作品選Ⅱ 水脈』ファーストワン.

こみゆにてい HP

<http://www13.plala.or.jp/web-community/>

池袋コミュニティ・カレッジ「小説の作法」

https://cul.7cn.co.jp/programs/program_510931.html

参考文献

早乙女勝元, 1971, 『東京大空襲—昭和20年3月10日の記録』岩波書店.

本稿の元になるエッセイは以下のフェイスブックに発表されました。

<https://www.facebook.com/tadahitoy.tokyo/posts/851620661692399>

2018年 第1回特別展
**名前と
顔と
足あと**
3月10日・失われた人びと

会期 2018年2月24日(土)～4月8日(日)

会場 東京大空襲・戦災資料センター 1階

開館時間 12:00 - 16:00

休館日 毎週月・火曜日

入館協力費 一般 300円 中高生 200円 小学生以下無料

主催 東京大空襲・戦災資料センター

企画・共同制作 霊名簿研究会

本特別展では、約3万人の東京空襲死者の情報が記載された『都内戦災殉難者霊名簿』のデータを基に、二つの角度から、「3月10日」に亡くなった人びとの存在を浮き彫りにします。

「いのちの被災地図II 遭難地別・犠牲者居住域と火災の相関関係図」では、3月10日の初期の火災域と火災の流れ、犠牲者の集中点を重ね合わせ、延焼の順序と、亡くなった方々の避難行動の関連を探ります。

「家族の資料に見る 亡くなった人びと」コーナーでは、ご遺族の協力を得て、霊名簿に記載された方のお名前と顔写真を展示します。

焼夷弾の炎に追われ、命を奪われたたたくさんの人びとの足跡と、名前と顔を持った一人ひとりの存在から、「3月10日」、東京の下町で何が起きたのか、思いをはせていただければ幸いです。

◎ギャラリートーク

3月9日(金) 13:00-14:00 / 15:00-16:00

担当 石橋星志 (墨田区立すみだ郷土文化資料館学芸員)

3月31日(土) 13:00-15:00

担当 山本唯人 (センター主任研究員)

◎オープニング・イベント

霊名簿から「3月10日」を読み深める

—新しいのちの被災地図と死者の名前・顔写真の調査を通して

2018年2月24日(土) 13:00-15:00

場所 東京大空襲・戦災資料センター 1階

あいさつ 青木哲夫 (センター主任研究員)

新しいのちの被災地図の解説

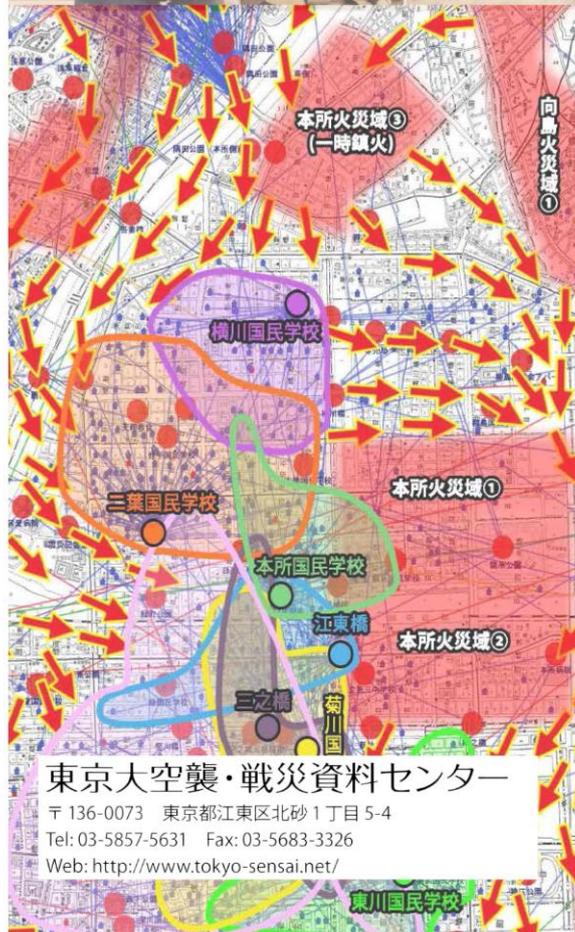
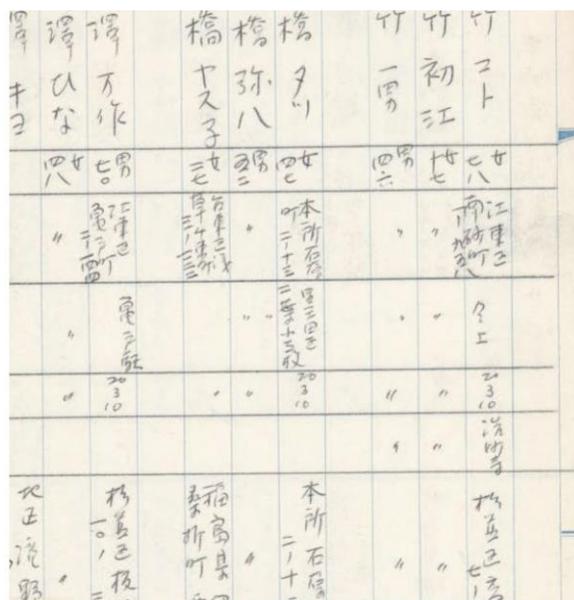
田中禎昭 (専修大学准教授)

石橋星志 (墨田区立すみだ郷土文化資料館学芸員)

家族の資料から見る亡くなった人びとの解説

大竹正春 (東京大空襲遺族、名前・顔写真提供者)

山本唯人 (センター主任研究員)



東京大空襲・戦災資料センター

〒136-0073 東京都江東区北砂1丁目5-4

Tel: 03-5857-5631 Fax: 03-5683-3326

Web: <http://www.tokyo-sensai.net/>

